

ちば歴史散策 こぼれ話

第6回 高梨美津と私立千葉産婆学校

高梨美津は、安政5年(1858)安房郡佐久間村(現鋸南町)の医師高梨安節の娘として生まれました。平群村(現南房総市)の高梨文策に嫁りましたが、夫が急逝したため実家に戻ります。その後、上京して東京府病院で産婆学を学びました。

卒業後、産婆の開業免許を取得した美津は、明治18年(1885)千葉市原産婆講習所を開設、同20年に産婆授業所、その翌年には私立千葉産婆学校と改めました。これは、千葉県下で最初の産婆学校といわれています。明治22年には校舎を千葉町長洲(現中央区長洲)に新築し、盛大な開校式を行いました。

当時、校主である美津の産婆術は高く評価されており、県立千葉病院から産科・婦人科の専門医を招いて学校での教育内容も充実させていました。また、卒業生には無試験で開業許可が与えられていたため、関東各地から入学希望

者が殺到したということです。

美津が産婆を志したのは、自分自身も難産で子を失い非常に苦しんだ経験から、産婆の必要性を強く感じ、「世の難産者を救いたい」と思ったためでした。いつの時代も出産は命がけのものですが、「棺桶に片足をを入れて産む」ということわざがあるほど、明治期の出産は妊産婦死亡率が非常に高かったのです。明治後期からは、近代的教育を受けた「新産婆」が増えたことも一因となって、妊産婦の死亡率は徐々に減っていきました。明治・大正期の千葉県において、美津は「新産婆」の養成に大きく貢献していたといえるでしょう。

大正11年(1922)に美津が亡くなった後、美津の養女となっていた姪の高梨ちせが学校を受け継ぎ、昭和18年(1943)に閉鎖を迎えるまで多くの産婆を養成しました。

*参考文献 『千葉県の歴史 通史編 近現代1』(千葉県、2002年)ほか



編さん便り

Chiba-shishi News Letter No.10 2013.3

千葉市史編さん担当

〒260-0856
千葉市中央区玄鼻 1-6-1
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231

健康志向??禁酒運動とは。

千葉市史編さん担当では、明治以降の新聞記事から千葉市域に関する記事をピックアップしてデータ入力する作業を、ボランティアで行っていただいています。小さな活字を追いながら、更にパソコンを使ってと、作業していただいている方には、無茶なお願いばかりで申し訳ないと思うことしきり。毎度頭が下がります。

いつものように入力作業をしていただいていたところ、「この記事にある『禁酒運動』ってなんですか?」との疑問が呈されました。この「禁酒運動」、実は当時の新聞記事にはちょくちょく登場するのですが、知っている方はどうやら多くはないようです。今回は、この「禁酒運動」を実際の新聞記事をみながらご紹介していきましょう(明治以降の新聞とボランティアさんの活動は、「編さん便り」6号でごく簡単に紹介しています。そちらもあわせてご覧ください)。

まず千葉県内の新聞事情を簡単におさえておきましょう。千葉県内で最初に新聞が誕生したのは明治6年(1873)のこと、木更津で発行された「木更津新聞」が最初でした。当時、木更津には木更津県庁が置かれ、上総国の政治の中心となっていました。「木更津新聞」は、県報的な色彩が強い、政府及び県の宣伝・発表の機関紙であったようです。翌年木更津県が廃止され、千葉県が成立すると同時に廃刊となっています。

県政の中心が千葉に移ると、そこから千葉にも次々と新聞が誕生します。まずは「千葉県日誌」・「千葉新

聞輯録」などが発刊されましたが、どれも県報的な性格の濃いものでした。ついで発刊された「千葉新報」は、当時の新聞紙条例や誹謗律の影響から政治記事を掲載することを避けていたため、比較的軟派な記事が多く、県民に親しまれるというところまでは至りませんでした。

その後、新聞は政党の機関紙としての性格を強く帯びるようになっていきます。そのトップを切ったのが「総房共立新聞」で、明治13年(1880)に国会期成同盟会請願に本県代表者として署名した桜井静を主宰として創刊されました(実際の発刊は翌年)。編集長には「横浜新聞」の硬派記者西川通徹を招き、反藩閥政府の立場を取る、かなり急進的な新聞でした。この「総房共立新聞」が発行されたため、県は御用新聞の必要性を痛感、「千葉公報」が発刊されます。しかし、この新聞も次第に自由党系の反政府的な色彩を帯びていきました(二年後に紙名を「千葉新報」へ変更)。その後政治問題を扱った記事により編集長が去り、「千葉新報」は次第にその活動を縮小していきます。これにかわるのが、桜井静の政敵板倉中を中心として明治21年(1888)に発刊された自由党系の新聞「東海新聞」です。その後、非政友系の新聞として「新総房新聞」が同27年に発刊され、千葉県に二紙対立時代が訪れます。現在ボランティアさんたちに主に作業していただいているのは、この「東海新聞」です。✓

平成25年度 千葉市史主催 講座のご案内

1 市史研究講座「千葉市の歴史を学ぶ」

定員 200名。会場；千葉市民会館小ホール。
対象；千葉市に在住・在勤・在学の方。
全3回(1回2講演、各講演80分)。
講演1；13:30～14:50、講演2；15:10～16:30を予定。
*市政日より(9月1日号)にて募集予定。
日程及び各回のテーマは以下の通りです。

第1回 9/21 (土)	1	千葉市の古墳(仮) 長原 亘先生(千葉市文化財調査協会)
	2	古代の集落と鉄生産 小林信一先生(千葉県教育庁文化財課)
第2回 9/28 (土)	1	千葉市の街道と中世城郭(仮) 遠山成一先生(四街道高等学校教諭)
	2	天保期の印旛沼堀割普請 小代 涉先生(柏書房編集部)
第3回 10/5 (土)	1	千葉町に正岡子規がやってきた 関 宏夫先生 (エコクラフト・風の教室主宰)
	2	町長加藤久太郎と県知事有吉忠一 神山知徳先生 (昭和学院中学校・高等学校教諭)

2 古文書講座

初級古文書講座

古文書解説初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。全5回。講師は小代涉先生(柏書房編集部)。日程は6/1・6/29・8/3・8/31・9/7(何れも土曜日)。同じ内容で午前・午後の部の2回に分けて開催します。
*市政日より(5月1日号)にて募集予定。

なお、初級古文書講座お申し込みの際しましては、**午前・午後どちらかを選択のうえ**、お申し込みください。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全5回。講師は後藤雅知先生(立教大学文学部教授、千葉市史編集委員)。日程未定(10月頃を予定)。
*日程は市政日より・郷土博物館HP等でお知らせいたします。古文書講座初級(各部)・中級とも定員は40名、会場は千葉市立郷土博物館講座室です。

どの講座も**往復葉書・電子申請**でのお申し込みです。
住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号を明記のうえお申し込みください(葉書の場合、一枚につき一人の応募)。電子申請の方法を含め、その他詳細は市政日より・千葉市立郷土博物館HPにてご確認ください。
http://www.city.chiba.jp/edl/kyodo/kyodo_top.html
*申込み多数の場合、抽選となります。

市民の声 千葉市史研究講座に参加して

この千葉の地にも古代人は住んでいた。考えれば当たり前前の事なのですが、私の漠然とした知識は、九州の吉野ヶ里や大和朝廷であって、千葉の各地にある貝塚を見てはいても、千葉の古代に人が住んでいた事とはかけ離れて考えていたようです。ですからこの講座も、千葉の地とは関わりのない従来の知識をなぞるものだと思っていました。ところが、予想が見事に外れ、全講座3時間近くを飽くことがありませんでした。

受講した講座のひとつめは、千葉の各地にある遺跡貝塚から発掘された人骨から考察した、縄文人の死生観。風土的に日本では人骨が地中に残りにくいと聞いていたのですが、この千葉にこれほど多くの人骨が残されていることにまず驚き、現代にも通じる死に対する

古代、それも「千葉に住んだ縄文人」の感情行動を興味深く聞くことができました。

二つめの講座は少し時代が下がり、十世紀前後の市原市稲荷台遺跡について。千葉氏の妙見信仰にも繋がる北斗七星をかたどる遺跡が、生活圏の身近にあることに軽い鳥肌がたち、発掘された土器に読み取れる文字、日付も様々な想像をかりたてられました。

写真図面など豊富な資料が配付され、全くの予備知識のない参加でしたが、講演内容を容易に理解することが出来ましたし、何より我が住まう地、千葉への好奇心をかきたててくれました。

講座は、時代を追って2回3回と続きましたが、都合がつかずその後参加できなかったのは残念でした。けれど、この1回だけの受講でも充分好奇心と知識欲を満たせてくれました。(H24年度受講者 菅伸子氏)

